

文化財レスキューと遠野

— 遠野市立博物館と遠野文化研究センターの取り組み —

The rescue operations for cultural heritages in Tono Museum

前 川 さおり

MAEKAWA, Saori

キーワード：東日本大震災、文化財レスキュー

Key words：The Great East Japan Earthquake, The rescue operations for cultural heritages

1. 東日本大震災と遠野市立博物館

遠野市立博物館と遠野文化研究センターの取り組みを紹介しながら、文化財レスキューについて考えてみたいと思います。

遠野は三陸沿岸から車で約1時間、60 kmの距離にあって、歴史的なつながりが深く、米と野菜を塩・魚に交換する関係がありました。物の行き来が人の行き来でもあり、遠野は山に囲まれて直接海を見ることはできないけれども、遠野の多くの人々は海岸に親戚や家族をもっていて、三陸の津波は他人事ではなかったのです。震災直後に遠野が災害支援の拠点となっていったのは、歴史的な必然や、地理的な優利さに起因しています。

震災直後、遠野市立博物館は通常の開館日でも来館者も入っていました。揺れが続いたので、ガラスなどから離れたところに誘導し、揺れがおさまってから外に避難させました。ところが、なかなか余震が収まらないし、電気も止まったので、そのまま休館になってしまいました。被害としては窓ガラスや壁に若干ヒビが入った程度でした。館外収蔵庫が博

物館から歩いて5分程度のところにあるのですが、もともと土蔵を使っている収蔵庫だったので壁が崩落しましたが、躯体には問題ありませんでした。

2. 震災直後の文化財レスキュー

問題はその日の夜からです。市の定めた防災計画に準じて博物館職員は、水道浄化センターに配置されました。全市に避難指示が出ていましたので、遠野の一部の人たちはその浄化センターに続々と避難してきました。その場所には、備蓄はなくて、自分の家から持ち出した毛布を赤ちゃん連れの方やお年寄りに配って、あとはかたまっで寝てもらうことしかできなませんでした。市のほとんどは電気が消えていて、災害の情報はラジオで聞きました。ラジオでは、三陸に津波が来ていて、被害が甚大であると繰り返しているのですが、具体的な被害状況はまったくわかりません。浄化センターは自家発電があり、その日の夜にはテレビを見ることができました。そのときに目の当たりにしたのは、真っ暗な

中で火の海になっている気仙沼の状況でした。その日は職員全員、床に寝て、翌朝と地区の人たちの持ち寄った食料で炊き出しをして、朝ごはんを提供しました。

その後、次の任務がきました。それが、私をはじめとした文化財レスキューの仕事でした。それは、遠野市役所中央庁舎にある美術品を移送することでした。建物は柱がつぶれて倒壊寸前で、重要なものについての避難が必要になりました。公用車も出払っていたので、自分の車に美術品を積み遠野市立博物館の館外収蔵庫に収蔵しました。

自分たちの拠点となるべき市役所の建物が被害を受けたことで、災害対策本部は外のテントに設置され、建物内の行政文書などは、東館に移されました。そのとき感じたのは、行政財産の避難先が防災計画に設定されていなかったことでした。いろいろな博物館の方に、あなたの博物館には避難先がありますかと聞いていますが、国の機関ですら、持っていません。

次に遠野市内の大慈寺で火災が起きたとの連絡を受けて現地に行きましたが、そのときは何もすることができませんでした。翌日、指定文化財の江戸時代の梵鐘を発見することができました。大規模災害だけでなく、このような災害はいつ起きてもおかしくないということを覚えておいていただきたいのです。そして、今回のように梵鐘を見つけることができたのは、事前にこのモノがどの場所にあるか、といったデータを博物館が持っているからで、所在がわかるデータを分散させて持っていることは文化財レスキューの大きな助けとなります。

その後は、松崎地区センターという公民館

のようなところで、市民のボランティアと協力して被災地に届けるおにぎりを作る事が次の仕事でした。一日のノルマは約2,000個で、各地区センターで作ったおにぎりを一箇所に集約して一日に2～3回、北は、山田町から南は陸前高田市まで運ばれていました。当時ガソリンが十分に手に入らなかったのも、三陸に食料を届けるのは遠野が一番近かった。まだ他所からの救援物資もきていませんでしたので、三陸に送る食料のほとんどは市民の寄付でした。併設されていた災害ボランティアセンターには、ボランティアを希望する人が多くやってくるようになり、私もボランティアコーディネーターのようなことをするようになりました。また、ある時は、三陸から避難してくる人の食事のお世話をしたり、避難のための空き家の掃除をしたりしていました。メールがこの頃には復旧して、三陸の情報が入ってくるようになり、特に気にしていた陸前高田市の状況を知ることができました。3月28日の休日にやっと陸前高田市に行くことができ、海と貝のミュージアムと陸前高田市立博物館を見ることができました。ガレキが押し込まれた陸前高田市立博物館の一角で「博物館資料を持ち去らないください。高田の自然・歴史・文化を復元する大事な宝です。」という置き書きを見つけました。([写真1])。その場ですぐに、海と貝のミュージアムの学芸員の熊谷賢さんあてに、何か手伝えることがあったら連絡をしてくださいと手紙を書いて、災害対策本部に行き教育委員会の人に手渡しました。



〔写真1〕震災直後に陸前高田市立博物館にあった書き置き。「博物館資料を持ち去らないでください。高田の自然・歴史・文化を復元する大事な宝です。市教委」と書いてある。

3. 三陸沿岸部の文化財レスキュー

熊谷さんから連絡があったのは4月に入ってからで、国指定文化財になっている漁労用具などの民俗資料を探してもらえないかとのことでした。そのことを館の職員に話し、同意を得ることができましたが、当時、遠野市の災害対策本部の了解を得ることはできませんでした。

公務として行くことが認められませんでしたので、休暇をとり、出かけることにしました。それが4月12日のことでした。文化財レスキューが公務として認められたのは5月になってからで、4月中はボランティアとして活動しました。

5月に公式に認められたのは、遠野文化研究センターが設立され、三陸文化復興プロジェクトを立ち上げたことによるものです。活動は当初、海と貝のミュージアムの職員、陸前高田市立博物館OBに岩手県立博物館を中心とした県内職員が加わっていましたが、ガソリン事情がよくなるにしたがって、山形や北海道、国のレスキューが入るようになりました。資料の避難先は、市内の山間部にある、旧生出小学校でしたが、移送する手段としての車が乏しいなかで、自衛隊にもお世話になりました。このことは、文化財レスキューは専門家だけのものではなく、一般の人でも一緒に行動することができるということを感じ

じさせてくれました。

大槌町立図書館では、閉架書庫にある明治以降の議会議事録などの行政文書160冊、郷土資料600冊をレスキューし、遠野に一時保管、ボランティアと協力してクリーニングを行っています。平成25年3月には終了する予定です。

陸前高田市立海と貝のミュージアムのツチクジラの標本のレスキューは、陸前高田市の皆さん、国立科学博物館と自衛隊などで行いました（〔写真2〕）。このようなレスキュー現場では、ふだんあまり交流のない自然科学系学芸員や保存科学の専門家のみなさんと、すごい勢いで情報交換が行われる場でもありま

した。

釜石市役所の公文書レスキューでは、岩手ネットの呼びかけがあり、国文学研究資料館が中心となったレスキューチームが組まれました。行政文書をスクウェルチ・パッキング法で乾燥を行いました。釜石市郷土資料館収蔵庫のレスキューは、山形ネット（山形文化遺産防災ネットワーク）と一緒にになった思い出深い仕事で、収蔵庫内部と資料の洗浄作業を行いました。陸前高田市埋蔵文化財収蔵庫の回収作業も岩手県内埋蔵文化財の担当者とともに行いました。

〔写真3〕は、大槌町立図書館から預かった資料の作業の様子です。風に当てて乾かし、



〔写真2〕 陸前高田市立海と貝のミュージアムのツチクジラの標本のレスキューの様子



〔写真3〕スクウェルチ・パッキング法による乾燥作業

次にスクウェルチ・パッキング法で乾燥することで、1枚1枚のページがめくれるようになりました。これで紙の水分を20パーセントに落とすことができます。

次の段階は、東京文書救援隊に教えていただいたエアストリーム法です。不織布とメッシュの網に一枚一枚紙を挟み、フロート板に載せて水をあててはけで汚れを落としていく方法で、1回で洗い、2回ですぐ、水分を吹き取るのはペット用のタオルが便利です（〔写真4〕）。その後ラックにダンボールで挟んでから置き、一方方向から風をあてて乾かします（〔写真5〕）。半日から3時間で紙が乾燥します。

〔写真6〕は、文化財レスキュー体験を小学

生にしてもらったときのもので、陸前高田市の高田小学校が遠足で遠野市立博物館に来た時に先ほどの文化財収蔵庫から回収してきた土器片を洗ってもらいました。土器に記されたマーク（注記）についてその意味について話しながら注記を消さないように作業しました。こんな時だからこそ陸前高田の子ども達に、地元の歴史に触れてもらい誇りと関心を持ってもらいたかったのです。文化財レスキューが特別なものではないということを広く知らせる必要があると思っています。



〔写真4〕エアストリーム法による水洗、乾操作業(上)

〔写真5〕エアストリーム法による送風乾燥(右)



〔写真6〕小学生の文化財レスキュー体験

4. 文化財レスキューを身近に感じてもらうために

文化財レスキューを広く知らせるために行ったのが、平成23年7月22日からの企画展「文化財を救え！東日本大震災と文化財レスキュー」です。一次洗浄が終わっている資料を借り出してきて、展示しました。被災地住民と災害ボランティアの人たちに、文化財レスキューというものがあり、求められればレスキューするし、資料の状態が悪くてもあきらめないでほしいという思いがありました。これを見てもらうことで、現地で少しでも救える文化財があるのではないかという期待がありました。24点という展示数ではありませんでしたが、文化財レスキューを少しでも知っても

らいたいという思いで展示をしました。

その後、代官山ヒルサイドフォーラム、東京都立中央図書館では、福島県や宮城県の資料も追加展示しました(写真7)。遠野市立博物館でも展示を行い、会期中にはレスキューの初動体制についてや救われた文化財の一時保管先の確保についてなど意見交換会が行われました。

今までの反省として、遠野市のような文化的なことに力を入れてきた市ですらも、レスキューについての理解を得ることに時間がかかったこと、水損資料の取り扱いなどに対する自分自身の関心が薄かったこと、文化財レスキューは誰でも出来ることであるとの認識をもつべきだったということがあげられます。



〔写真7〕東京都立中央図書館で行われた「震災からよみがえった東北の文化財展IN東京」
(2012年2月26日～3月11日)

現在の問題として、被災地では文化財の保管場所が十分に確保されていない、またはないという状況にあるということです。山田町の文化財収蔵庫は流れてしまって、残された民具などを置ける場所が確保できない状態です。海と鯨の科学館の周りはガレキ置き場になっていて、被災した館にレスキューされた資料はそのまま保存されています。

またレスキューした資料を、何らかの方法で人目に触れる機会を作らないといけなく考えます。どのように活動を長い時間続けていくのかということ、文化財を地域住民の力になるような活動をどのようにしていくかが課題のひとつとして考えられます。

内陸の博物館の人たちの言葉として、レスキューに参加しなかったが自分たちも何かできることはないかという声が多く聞かれました。通常の博物館がやってきたことに三陸のことを加えてもらって、東日本大震災についての記憶を多くの人と共有すること、文化財を大切にすることについて考えるきっかけをつくることはこれからでもできるのではないかと。

そのモデルケースとして、東京での展示をしてきたところです。長く無理のない方法で、被災地とつながっていける方法を探してもらいたいのです。

今後の課題の2つめとして、文化財を救うのは何なのかと考えると、文化財を身近に感じてもらうこと、そしてそれが大切だと感じられる人を身近に育てることが、きっかけになっていこうと思います。

陸前高田市立図書館に保管されていた吉田家文書をレスキューしたいと動き始めたのは地元の市民グループで、それが岩手の文化財レスキューのはじまりでした。

山形ネット（山形文化遺産防災ネットワーク）の活動は、多くの人が文化財に触れる機会を得ていることで、文化財を身近に感じてくれています。なにかあったときに文化財を救う種（たね）になっていると思います。日常の活動で身近な文化財に触れていくことで、いざというときに立ち上がれる人が現れる。それは、このなかの人たちだと思いますし、そうなることを期待しています。

付記

本稿は、2012年6月16日（土）に開催された2012年度山形大学歴史・地理・人類学研究会大会での講演「遠野はくぶつかん物語ーまちづくりと文化財レスキューー」のうちの、文化財レスキューに関する部分をまとめたものである。